

3. 年令集団と講集団

(1) 年令集団

子供組

尋常小学校1年生から高等小学校2年生までの児童で組織され、内出にも、南にも各々あった。昭和13、4年頃まで、村の行事の中で、大活躍していたが、現在は無い。子供組が活躍した行事の中で、天王様のお祭りは、戦争をはさみ、昭和15年には、学校からも、お金を集めることを理由に中止命令が出て、中止になっていた。戦後、青年を中心に、樽神輿を出して、続けていたが、昨年(昭和58年)内出・南、両部落から1千万円の寄附を集め、大変立派な神輿を新調し、盛大なお祭りを行なった。

さて、この子供組であるが、特別名称がある訳ではなく、小学校入学と同時に、自然に入った。入学の頃は、登校のために、南では、学校へ行く子全員が、稲荷様の境内に集合し、そこで、待っている間少し遊んだりしたが、その場所へ、一年生の親と一緒に来て、「この子をよろしく頼む」と挨拶をした。

高等科2年の子供達が「大将」と呼ばれ、4月～3月までの一年間、総指揮をとった。まず4月、今まで大将の下で、一番よく働き、大将の仕事をよく見ていた、高等科1年の子供等が、進級して、晴れて大将になる月。この月の後半から、南・内出両部落一緒に、天王様の境内に集まって、祭りの準備等、相談の寄り合いを持つ。この時、各子供1人1人が祭りのための準備金を出した。昭和10年頃で、小学校1年生が1銭、2年生が2銭、3年生、3銭、4年生、4銭、5年、5銭、6年が5銭～10銭で、大将だと20銭位だった。このお金は、主に、万灯作りの費用に使った。小学校1、2年の子が走り使いし、色紙や絵の具など、材料を買いに行ったり、はさみを借りてきたりして、上級生の子供達、みんなで、万灯作りをした。木や竹などは天王様の裏口にしまっているのを、毎年出して使った。その他に、樽神輿の補修もした。樽神輿は、下が樽3コ、上が2コで、屋根がつき、木の棒をつけて担ぐ。万灯は、「花万灯」と「あばれ万灯」で、花万灯には、花をたくさん付け、あばれには、花をつけない。この二つは、男子が持つが、「でんがく」は女子が持つ。作りものをする一方で、笛や太鼓の練習も始める。大人は、南・内出、両部落の年番、合わせて10人が、監督として見守るだけで

ある。

いよいよ祭り。7月31日は宵宮。この時は、^{こま}神を担いで回った。大人と子供と2組でた。神は、どこの家のもも、もらってよく、一回りしてきた、この神の枝を、皆欲しがり奪いあって家に持って帰った。

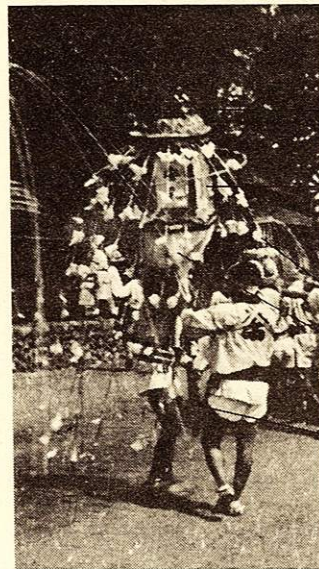
8月1日、^{ほんみや}本宮の日、子供達は、まず、5・6年生の子が、^{たけ}篠竹でヘイソクを作り、部落中の家々を、「家内安全、家が繁盛するように」と称えて、お払いして歩いた。この時この子等は箱を持って歩き、各家で2銭〜10銭の「おひねり」をもらった。だから、これを「銭もらい」とも言った。

「花万灯」と「あばれ万灯」は6年と高等科1年の子が中心に担ぎ、跳んだり跳ねたりして、振り回しながら、交付しつつ、部落中を、練り歩いた。

太鼓は、2・3年生の子がたたき、1・2年生や、もっと小さい子などが、縄を引き、舵とりは、3年生がした。

縄引きの子供達の先頭に、鉄で出来た、「ザンザラ」を持つ子が歩き、笛を吹く子は、6年生が、2・3人ずつ交付で吹いた。太鼓打ちが1区切りする度に、この「ザンザラ」が「ジャ〜ン」と入り、すると、引いている子供達は、口を揃えて「ユーワイ、ユーワイ」と囃す。この太鼓のたたき方は、大太鼓は「ドンドン」しめ太鼓は「カッカッ」と打つ。

① カッカッカッカッ ドンドン カッカッ ドンドン カッカッ ドンドン



岩と人形
(古い五月
人形)

すかし
紙は蚕の種
紙の裏を利用
して絵や
文字を書いた。

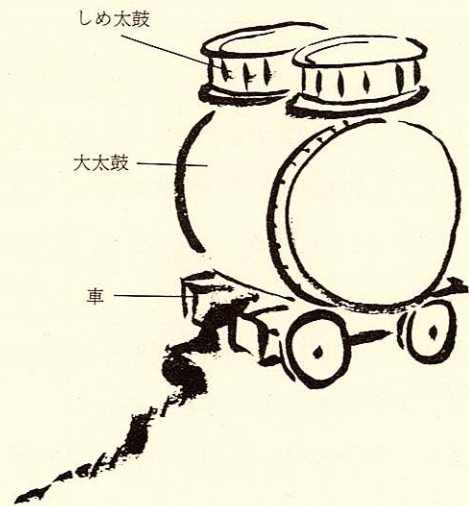
花

こしまき
(布)
木綿で柄物

木

▲写真18 花万灯(昭和)

図11



しめ太鼓

大太鼓

車

- ② カッカッ ドンドン カッカッ ドンドン カッカラカッカラ カッカ ドンドン
- ③ カッカッ ドンドン カッカッ ドンドン カッカラカッカラ カッカ ドンドン
- ④ カッカッ (オッピー) ドンドンドン
- ⑤ カッカッ ドンドン カッカッ ドンドン カッカツラカッカ ドンドン
- ⑥ (小太鼓のみ) ヒャーリトーロ オッピート〜ロ テンテロ スカシッピ オーカタキ
 ャ ヒリヒリ ホロホロ ヒャ〜ヒャ
- ⑦ ドンドン

以上が一区切りで、これを繰り返す。

この行列は、午前中に出て、東へ向って出発した。

万灯は、夜になると、ろうそくを点し、「すかし」を見せた。

楽しかった祭も終り、翌日、2日になると、後片付けをする。この時、万灯に使った、腰巻と呼んだ布は、買った時の半値位の値段で、農家に売りに行った。このお金や、1日にももらった「おひねり」のお金、全部出して、大将が考えて、全員に年令や働きを考慮して、分配した。そのお金は、はじめに出した、準備金を上回るもので、そのお金で、家の人からはなかなか買ってもらえない、マンガ本、ノラクロや冒険ダン吉を買った子もいたという。

なお、この天王様の祭りには、女子はほとんど、ノータッチである。

次に秋。十五夜、十三夜の晩には、どこの家でも、お月様に供え物をあげた。特に十五夜はかならず行った。その晩、子供達は、「柿もらい」と称して、三々五々、袋を持って、「お婆さん、柿くんない」と言って、供えものをもらって歩いた。6年生位までが行った。背中に、赤ん坊をしょってれば、2人分もらえたという。内出部落では、震災後は、なくなってしまったと言ひ、南部落でも、昭和の始め頃までで、その後は、「柿もらい」はやらないという。

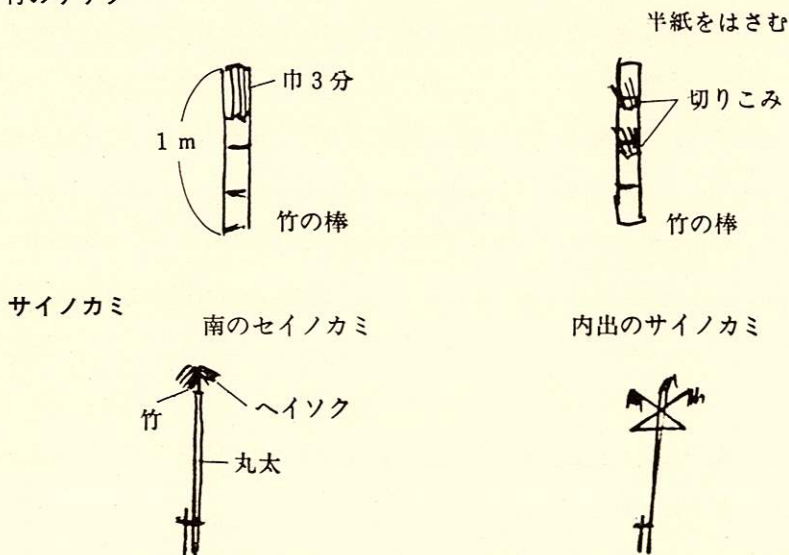
さて、年があけて、新年。子供達は、三ヶ日が過ぎると、部落中の各家々、あるいは拝島の方まで回って、正月使った、門松や、お飾りを集めてまわった。商店では、まだ片付けるには早いからと、ことわられたこともあった。片付けを頼む家では、何がしかの「おひよ」(おひねり)を片付け賃にくれた。集めた物は、カヤノキ(細谷健治宅)のそばの、分水の縁、道路傍、3坪位の所に積んでおいた。そして、そこに、竹と麦わらで、高さ5尺、広さ1坪位の小屋を、1日がかかりで、子供達で作った。寝泊りすることはなかったが、14日の朝、「ドンド焼」の時に、大人の年番の人が、この小屋をこわして、焼いてしまうが、その時、なかなか壊られないように、地中深く、竹の柱をさしこんだりして、頑丈な小屋を作るよう努力した。

「おひよ」のお金で、菓子やみかんを買って、やはり大将の才覚で、働きに応じて、子供全員

に分けてやった。戦前までに終わってしまった行事である。

1月7日は、「セイノカミ」、子供達は、この朝、早く、暗いうちから、行動を開始する。4日か5日にすでに作っておいた、1m位の竹の棒で、上部を、巾3分位にまっすぐ割って、ササラにしたものを男子が持ち、女子は切り目の入っている竹の棒を持って、部落中、全戸（南の場合だと45戸）回って歩いた。古くは、ネンバンと一緒に回り、「セーノカミダセーナ、ダサネートヨメノケツブツタクゾ」と言ったと言うが、昭和の10年代では、何も言わず、ただ、男の子は、その日は、天下ご免の日だからと、農家の各家のニワに敷いてある、霜よけのために、敷きつめたワラを、そのササラの竹で、子供同志ひっかけてこして、メチャクチャにした。どの家でもやった。女の子は、各家で正月にお供えの下に敷いた、半紙を四つ折にして持っている竹にさしてもらった。回り方は決っていないが、最後はネンバンの宿に行くようにした。そこでネンバンは、集まった半紙で、全戸分のヘイソクを切り、南では石川定七方で、預っている、15m以上もある丸太の上に竹の棒を指し、それにこのヘイソクを一戸一戸分別にして、麻で、竹の棒に結えつける。それにダルマを一個つけて、アキの方に向けた。この棒を、サイノカミサマと言って、南では石川酒造のカド地（今駐車場）に立てた。男の子達は、全戸を回ると、戦争色が濃くなっていく時代を反映して、その日は、10時半～11時に、お弁当持参で多摩川へ、手製の鉄砲やサーベル持って、戦争ごっこをしに行ったという。昭和12・3年頃でこの行事もなくなってしまった。

図12 竹のササラ



1月13日は「メイダマ」作り、コカゲサンへ上げるのだとあって、柳の木の枝を切ってきて石臼に立て、その枝に「ジュウロクメイダマ」と言って、直径5cm位の大きい団子を16個、その他、小さい団子はたくさん挿して、ミカンもさして作った。その時一緒に、1月10日の琴平様（熊川神社の境内に祭ってある）の縁日で、サンドブチ（露天商）が売っている飾りものを買ってきて飾った。この日、子供達は、柳をとってきて、自分の年の数だけ、団子をさしたものを作っておく。

14日の朝、その柳の枝を持って、小屋を建てた所で、ドンドン焼（ドンド焼）をした。朝、暗いうちから始め、ネンバンの大人が小屋を壊して、火を焚いてくれる。その焼いた団子を食べると、風邪をひかないと言って、その火で焼いたものを食べた。親と一緒に付いてくる子も居た。お日様がのぼる頃は、もう残火で、子供達は居らず、子守ばあさん達で、その火にあたって、おしゃべりを始める。10時頃には、完全に消え、ネンバンが、火の仕末をする。この行事も戦前までで終わってしまった。

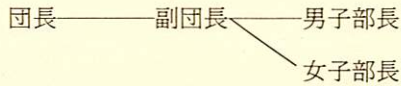
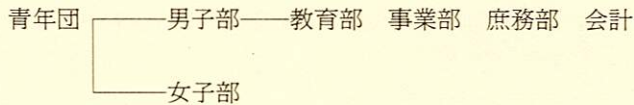
1月25日は「天神講」。昭和10年頃まで行なった。男、女別々に行なった。まず午前中に、天神様（八雲神社のとなりに祭ってある）へお参りに、大將が引率して行った。それが終わると、大將の家で、五目飯をご馳走になった。五目飯の材料は、子供達1人1人が、各自の家庭からある物を持ち寄り、大將の家の人が、五目飯を炊いてくれた。それからおしゃべりしたりして3時頃に解散した。この行事も昭和10年以降なくなってしまった。

2月に入ると2月11日の稲荷講がある。この朝早く、ネンバンが、「おむすび取りにこい！」と大声で言って、太鼓をたたく。子供が両手でやっと持てる位の大きなおむすびで、まんまるく、1人1個ずつもらって食べた。普段は七三かせいぜい四六の麦飯を食べているので、この白米のおむすびは、大ご馳走であった。この後、紀元節の式典出席のため学校へ行って、帰ってから、又、お稲荷さんの、境内へ行った。ここは1日中、火がもえていて、その火で、供えものの、いわしを焼いて食べるが、何とも言えぬ程おいしかった。この日は、お稲荷様へのお供えものは全部、自由に食べてよく、全て大將の指示に従って行動した。この仕事が、「最後の大将だ」と言い、3月を迎えると高等科を卒業し、子供組からも抜ける訳である。

青年団

男子は青年会、女子は処女会と、別々の組織であったが、昭和2・3年頃、両者が合同して青年団と名を変えて発足した。

組織は下記のようになっている。



さらに、南・内出・鍋ヶ谷戸・牛浜・武蔵野（停車場と呼んでいた）の5つの部落の青年団で、「熊川青年団」を組織し、200名位の団員がいた。熊川神社境内にクラブを建設し、月1回の会合を持った。役員は、会長1名、副会長2名、幹事は、各地区から2名ずつ出した。この中の事業部では、桑原（2反位）を借りて、桑を作り、養蚕をしている農家に入札させて売り、利潤を上げたり、東電の電灯料金の集金をしたりした。桑原の方は、昭和16年以降、養蚕が振わなくなり、止めてしまった。東電の集金も、東電側の理由で中止になってしまった。

処女会は、建前としては、加入は希望制をとっていたが、実際には、学校をさがった16才〜結婚するまでの部落の娘は、ほぼ全員加入していた。学校を卒業する時に入会した。

青年会も同様に15才〜25才位まで、結婚すると退会した。

地域の青年会との交流も盛んで、春先には、泊りがけで、幹部講習会を開催したりした。熊川神社が会場になったこともあった。多摩全域の連合運動会が、現在の立川高校のある所で開かれた時は、皆で応援に出かけ、その時歌った応援歌を今でも歌えるという話者もおられる。この時の800mリレーでケンカがあり、この時から多摩全域の運動会は中止になってしまった。

昭和5年に、福生、熊川、拝島、秋留台の4ヶ村対抗陸上競技会を開催し、各村落で9月に行われたという記録が残っている。その他、夜、月2回、輪読会も行った。

昭和16年に官製の「大日本青年団」も発足し、福生青年団となった。戦争中は、若い人が、戦場へ行ってしまったため、1戸から誰でも男の人が1人加入するという、「翼賛壮年団」と変わってしまった。昭和20年11月、再建されて現在に至る。

南・内出の各部落の各々の青年団も大活躍し、青年団主催の旅行会を実施し、三峯や日原の鍾乳洞へ行ったりした。

青年会の時代（昭和1・2年の頃）に、南では、春・秋2回旅行し、秋には、日光へ2泊3日の旅をした。青年会員は5円で、小学生が3円50銭だったという。4・5年たって、今度は仙台まで、やはり2泊3日で行き、この時は15円だった。

又、青年会、婦人会、小学校の三者で主催する連合運動会も行った。

その他、道普請、雪かきも、青年会の仕事の一つであった。

又、青年学校が2校あり、正月～3月の農閑期に、女子には裁縫やお作法、男子には、剣道や柔道を無料で教えた。夜学校である。

以上みてきたように、青年団は、部落の中で、大変積極的に活動し、その部落での推進力となっていた。

消防団

学校を卒業と同時に入団した。消防や消火活動を行った。戦前は、熊川消防団と言ひ、戦争中は、警防団（第一が内出、南、第二が鍋ヶ谷戸、牛浜）となり、戦後、昭和23年に、福生町消防団となり、現在に至っている。

分団長(1) 副分団長(2) 部長(2) 班長(各地区ごとに)の役がある。

用具をみると、昭和7・8年頃までは、手押ポンプだったが、その後、手引ポンプ、ワンヨウポンプ、自動車ポンプと変っていった。

手押ポンプの時代には、ズック係（ズック（ホースのこと）を入れたカゴを引っばる）ポンプ係、とび係 長梯子係（新しく入った者が当る）短梯子係などの係が決っていた。手押ポンプは1台だった。

1月8日に川原へ出て、出初式を行った。又、分団毎に、消法（ポンプの操作の仕方）をダルマ落としをさせて、競わせたという。

火事を知らせる半鐘は、福生のどこに居ても聞え、ジャン ジャン ジャン と3つずつ3回、打ったものであり、近くの時は、ジャ～ン ジャン ジャン と乱打した。鐘は、寺の鐘楼を使った。

消防団とは別に、戦前まで「火の番」という制度があり、1ケンから、かならず1名出て、11月末～3月いっぱい、夜の9時～朝5時まで、5人1組で、1時間おきに、部落を巡回した。

(2) 講 集 団

稲荷講

II. 社会生活、1、村落構成、(2)共有財産の項参照

榛名講

稲荷講の構成メンバーとまったく同じで、農家の人が入る。南にも内出にもあった。カタオシで、組順に当番があたった。当番に当たった組の中から2名が、榛名山へ代参に行った。代参に行く人の旅費は、講から出した。八高線に乗って行き、伊香保温泉の油屋に一泊した。講中全員に「お札」をもらって来た。帰ってくると、年番の家で、「お日待」をした。ご飯と豆腐の味噌汁が出た。茄子のよごしも出た。戦争の始まる頃、なくなってしまった。

大師講

南の33~4人で構成している。世話人は代々同じ家の人になっている。拝島の大師様を信仰し暮には護摩を焚き、初午の護摩も受けてくる。

子の山講

福生全体で20人位の構成員である。子の権現様を信仰し、この神様は、腰から下の病気に特にご利益があるといい、足腰の神様だと言われている。お参りは年に1回で、4月にお金を、講元へ届けている。

おしら講

「お蚕日待」ともいい、養蚕が盛んだった頃あった。オンナシ（女の人）の講で、南にも内出にもあり、蚕をやっている、おかみさん達の集まり。宿は順ぐりに持ち、年1、2回集まった。組の中の一軒が宿になり、米2、3合位ずつ持ちよって、飲食した。

天神講

1月20日 子供中心の行事だった。 子供組の項参照

心経講

真福寺を中心とした講で、内出にあった。明治20年頃できて、最盛期には35軒位入っていたが、10年位前になくなってしまった。年4回位、秋～冬にかけて集まり、宿は回り持ちであった。夜集まり、宿になった家の床の間には、掛軸を掛け、木魚をたたいて、一人の音頭に合わせて、般若心経を、33回あげた。これが終わると、宿で作った、赤飯、人参、ゴボウの煮物をいただいた。お酒を出す家もあった。お正月には、講の人々で、お日待をした。

御詠歌の講

南、内出の両部落の人々で、50才以上の人、24人で構成している。出来てから5・6年たち千手院に週1回集まる。鎌倉建長寺のお祭りの、8月23日24日には、お揃いの着物で、鎌倉までいく。

豊川稲荷講

熊川全体で一つあったが、戦前になくなってしまった。

御獄講

昔あった。とか、牛浜にあったようだとかの返事が返ってくる程度で、かなり以前にはあったが、今はない。以前あったことの証明として、内出英雄家文書の中に、下記のように、御獄山のお札を配ったことが、わかるものが残っている。ほとんどの家が講員だったと思われる。

御獄山御札

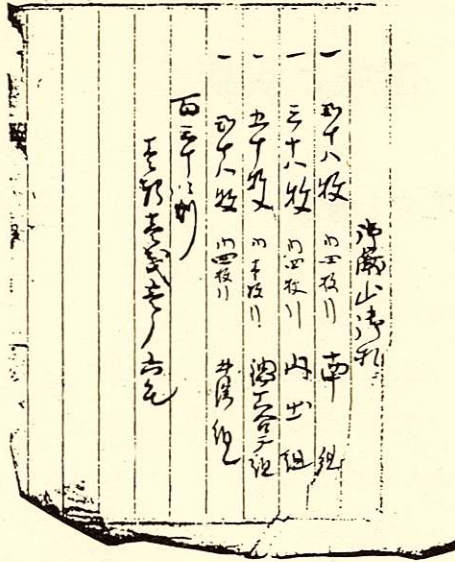
1	式十八枚	内 四枚引	南組
1	三十八枚	四枚引	内出組
1	五十枚	老枚引	鍋ヶ谷戸組
1	式十八枚	四枚引	牛浜組

百三十之割

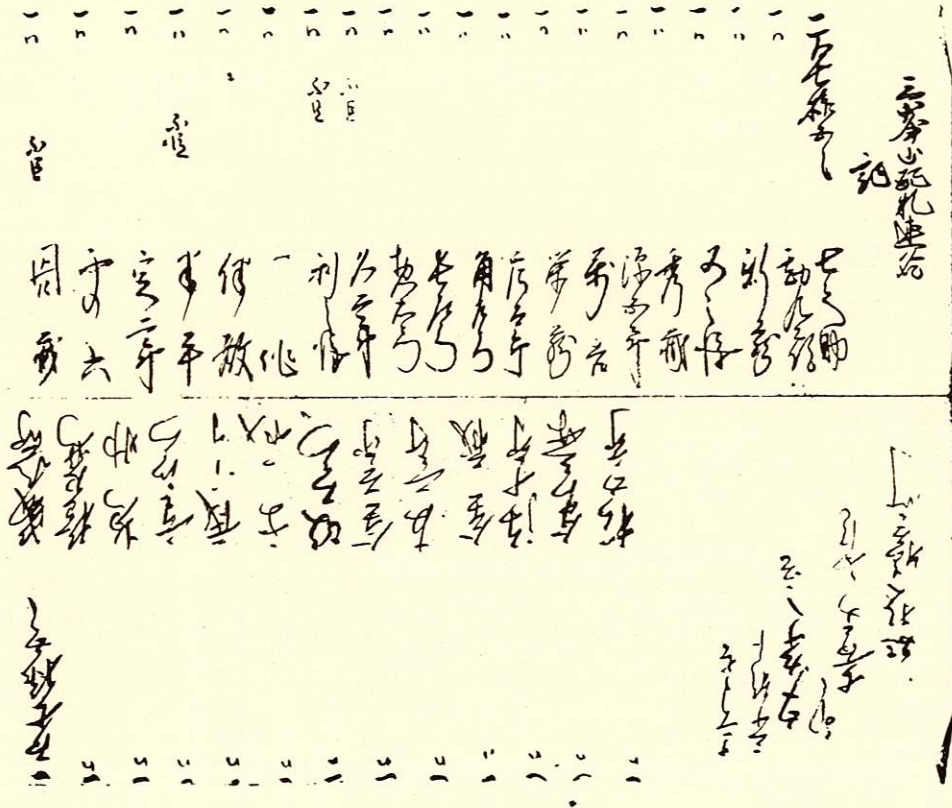
壺軒 老銭老厘六毛

三峯講

やはり、石川元八家文書の中に、お札を配ったことがわかる文書があるが、現在はなく、ずい分昔になくなってしまったようである。



▲写真19



▲写真20